

台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に

## 関する一考察(一) — 祖先祭祀をめぐる問題 —

安部 力

### はじめに

本論は、現在の台湾の人々が持つ宗教意識に焦点を当てた考察である。特に、カトリック・キリスト教の信者(適宜、プロテスタント側の意見も参照する)の「祖先祭祀」に対する意識を取り上げ、考察の対象とする。

それは、カトリック・キリスト教が一六世紀末に東アジア地域に伝来し、宣教師が布教活動を行う際に大きな障害となつて立ちどかつた問題が、この「祖先祭祀」だったからである。詳しくは後述するが、一六世紀末に発生した問題が、現在どのような状況にあるのかを考察することによって、当時の問題を逆照射できるとも考えている。

### 一、一六世紀末から一八世紀初頭の中国における「典札問題」

一六世紀末に東アジア地域で布教活動を開始したフランシスコ・ザビエルを始めとするイエズス会修道士(以下「イエズス会士」とする)は、布教地域で様々な文化的問題に直面した。中国に例をとれば、それは所謂「典札問題」であるが、ここで「典札問題」について概観しておきたい。

この典札問題とは、簡単に言えば「布教方法」をめぐるイエズス会とドミニコ会(及びフランシスコ会等の托鉢修道会)との対立が、そのままバチカン法王庁と清朝政府との対立になった事態を指す。結果として、イエズス会を始めとする修道会は、時の政府である清王朝(雍正元年・一七二三年)によって、中国における布教活動を禁止され、国外退去を命じられることとなってしまう。そして法王庁では、一七四二年に「イクス・クオ・シングラレ」という大勅書により、イエズス会の立場が全面的に否定されることとなる(1)。

この典札問題で争点となつたのは、主に次の三点である。

一、「天主」という言葉の使用。これはキリスト教での「デウス」にあたる中国語として、どのような言葉を用いるか、という点が問題となっている。例えば、イエズス会士は「天主」という言葉を原則として用いるが、中国人が「デウス」を説明、表現する際に「上帝」「天」という言葉も使用して良いとした。二、孔子に対する崇拜、祭祀のための儀式への参加。これは中国人、中でも士大夫層が毎月行う孔子に対する祭祀儀礼に参加することへの可否であるが、イエズス会士は中国人信者がこの儀式に参加することを許可した。三、祖先崇拜、祭祀のための儀式への参加。これは中国人の大多数が行う祖先を供養・思慕する儀式を行うことや参加することについての可否であるが、イエズス会士はこれも許可をした(2)。

以上の三点は、中国におけるイエズス会士の活動の基礎を作つたマテオ・リッチ(中国名は利瑪竇、イタリア人、一五五二―一六一〇)がとつた所謂「適応主義」(「適応政策」)である。これはリッチの創出したものではなく、直属の上司であつた東インド巡察師、アレックスandro・ヴァリニャーノ(中国名は范礼安、イタリア人、一五三九―一六〇六)が採用した基本方針でもあつた。そのためイエズス会は、このような中国人信者が極力周囲の「異教徒」と衝突しないための配慮として、現地の言葉を用いることや「孔子祭祀」、「祖先祭祀」等を「儀礼」として容認したのである(3)。

しかし、イエズス会に遅れて中国での布教活動を開始したドミニコ会やフランシスコ会は、このようなイエズス会の「適応主義」をキリスト教神学の根本を揺るがすものとして攻撃し、イエズス会が中国人信者に対して許可をした前述の三点を容認できないものとした。この「布教方針」の可否を巡る対立は、法王庁をも巻き込んだ争いとなつてしまい、結末は前述の通りである。

### 二、現在のキリスト教世界と台湾の状況

一六世紀末から一八世紀にかけて中国で発生した典札問題の主な要因は既に述べた通りである。イエズス会はその後、一七七三年に教皇クレメンス一四世に解散を命じられた。しかし一八一四年には教皇ピウス七世によって再興され、その

後、今に至るまで紆余曲折を経ながらも、カトリック・キリスト教の一修道会として布教活動を行っている。

さて、現在、キリスト教は、諸派（カトリック、プロテスタント、聖公会等）を含めて、信者数が二〇億人を越える、世界でも最大規模の宗教団体であり、世界中で布教活動を行っている。しかし、それが故に、各国・各地域における文化的衝突や軋轢については、現在も絶えることがない。それは東アジア地域においても同様である。そして東アジア地域においては、前節であげた三点の中でも「祖先祭祀」に関する点が最も難しい問題の一つとなっている。

何故、「祖先祭祀」が現代でも難しい問題となっているのか。それはそこに「宗教的感情」を読みとるか否かの難しい判断が存在するからである。カトリックでは「三位一体の神」以外への「信仰」は認めていない。無論、マリア信仰、聖人信仰が実態として存在している可能性は認めても、「万物の父なる唯一の神」への信仰が第一義である。だからこそ「祖先」への「信仰」と認識できるような（宗教的）行為は容認されない。これは一六世紀末の中国でマテオ・リッチが直面した問題でもあったが、リッチはこの「祖先祭祀」を「伝統的な儀式」に過ぎないものであり、「信仰を表すものではない」として容認し、問題を回避した。しかし、これは伝統的なキリスト教の立場から言えば、（ドミニコ会等のように）やはり看過できないものであった。それ故、この「容認」が一因となり、イエズス会は解散を命じられることになったのである。

しかし今日、キリスト教が世界各地の様々な文化を持つ人々を対象に布教活動を行うようになった結果、伝統的な布教方針（例えば「文化的征服」のような方法）では対応できなくなっている。このような状況の中、カトリック教会は一九六二～六五年にかけて、ローマで第二バチカン公会議を開催した。この公会議では「対話主義」や「エキュメニズム（教会一致運動）」を推進することが提唱された。この公会議の特色は「他宗教にも真理が含まれている」ことを公に認めた点である。この公会議の方針が現在のカトリック教会の基本方針となっている<sup>(4)</sup>。このようなカトリック教会の動きを受けて、現在、諸宗教に対するキリスト教信者の対応の仕方を示した様々な手引き書が出版されている。文末に参考資料として日本語訳を付した『教友問答手冊 天主教的祖先崇敬』は、台湾でカトリックの信者向けに出版されたそのような手引き書の一つである。

ここで、何故本論で台湾を対象とするのかについて簡単に触れておく。

現在、台湾のキリスト教徒は、全体で約七〇万人（カトリック三〇万、プロテスタント等諸派四〇万）、総人口の3%弱程度である。少数派であるが故に信者の置かれている他宗教との文化摩擦は深刻な問題となっている。このような状況を背景としているからこそ、台湾でのキリスト教会は、信者が直面する現代的課題、特に「宗族規範」を念頭に置いた研究を盛んに行っている。また、仏教や道教等の伝統宗教も多くの信者を抱えているため、台湾の「宗教的雰囲気」は濃密であり、特に道教に関しては中国大陸よりも、人々の間に根強く浸透していると言える。このような宗教的状况を背景としているためか、附論としての参考資料でも、道教儀式との兼ね合いが強く意識されている。この点が、日本における同様の手引き書とは異なっている点である<sup>(5)</sup>。

以上のような理由から、本論では現在の台湾を取り上げることとしている。無論、先にも述べたように、射程は一六世紀末の中国を含んでいるのであるが、以下では台湾の現在での研究の状況を概観しながら、どのような観点から解決が図られているのかについて、考察したい。

### 三、現代台湾における「典礼問題」について

本節と次節では、典礼問題のなかでも特に現在、問題となっている「祖先祭祀」と、その解決の基礎となる「本地（本色）化」（土着化）及び「宗教間対話」に焦点を当てながら見ていくこととする。

まず、「祖先祭祀」において最も困難な問題に直面するのは一般の信者である。そのような信者のために出版された手引き書が、先に紹介した『教友問答手冊 天主教的祖先崇敬』である。これは「祖先祭祀」に特化した手引き書であるが、従来の信者向けの手引き書でも、祖先祭祀を扱っている。例えば、一九七二年に出版された『天主教教義問題解答』では、「第250項 天主教では祖先に対する焼香や位牌を供えることを許可していますか。（答）天主教では元々先祖への孝行を重んじているから、焼香や位牌を供えることを許可しているだけでなく、それらについては積極的に勧めてもいる。但し、位牌に「神」という字を用いることは認めていない。それは亡くなった故人は神ではないから、「神位」という文字を使うことは理屈として通らないのだ。（天主教許可対祖宗焼香及供牌位嗎？）（答）天主教素重孝道、不只許可焼香及供牌位、而且力加倡導。但牌位上勿加「神位」



字様、因為亡者非神、所以写「神位」与理不合。」とあり、簡単ではあるが「祖先祭祀」に関する言及が見られる。また、二〇〇三年に出版された『天主教教友手冊』では、「教友生活守則」として「(20) 父母の葬式については悲しみや慎み深い敬意を表すべきであるが、見栄を張って誇張してはならない。土葬と火葬はどちらにしても良い。(對於父母的喪葬、応表達出悲哀与肅敬、不可過分鋪張。土葬与火葬均可。)」とあり、必ずしもキリスト教の伝統的な埋葬法である「土葬」にはこだわっておらず、更に踏み込んだ内容となっている(6)。

これらを見ると、依然として「祖先祭祀」がカトリック信者にとって切実な問題であり、それは現代の台湾に於いて、人々の祖先祭祀に対する意識の根強さも示していると言えるだろう。

このような祖先祭祀に対する問題意識はカトリックに限ったものではなく、プロテスタント側も共有している。例えば、『基督教徒与敬祖—敬祖研討会彙編』収載の論文、董方苑著「基督教徒与祖先的対立? 談祖先崇拜对基督教宣教与障害」に、

「以上の検討から、我々は台湾の民間に於ける祖先祭祀(崇拜)の重要性や、それが果たす宗族社会に於ける役割、そしてそれがキリスト教の布教活動に対して大きな障害となっていることについて、おおまかな理解はできた。と同時に、カトリック(天主教)が長年公けにしているこの「祖先祭祀」にまつわる問題と挑戦に対しては、更に認識と検討を加えることによって、プロテスタント・キリスト教(新教)がいかにして祖先祭祀の問題について解決の道を見いだすかということに引き継ぐことができる。それは、我々はキリストを信仰することと祖先を敬愛することは決して衝突するものではないと確信しているからである。(従以上の討論、我們對於祖先崇拜在台灣民間信仰中的重要性、它的宗法社会的功能与对基督教宣教事工所遇到的正面阻力、大致有個概括的瞭解。同時對於天主教多年來公開祭祀的問題与挑戰、也加以認識与検討、接下来的基督教(新教)如何尋找出一條祭祀問題的疏通之道、因為我們確信皈依基督与敬愛祖先的倫理風尚兩者並不衝突。)」とあるのを見れば、プロテスタント(新教)側にも、「祭祀問題」を始めたとする「民間宗俗」との接点を模索する動きがあることが分かる(7)。

以上の「祖先祭祀」問題に絡んで、必ず言及される問題が「本地化」である。これは「本色化」「土着化」とも呼ばれるが、第二バチカン公会議の基本方針を尊重していくのならば、「当該地域の文化を尊重する」はずであるから、どのように現地文化と融合(融和)を図っていくのかは避けて通れない問題となる。それ故、

この「祖先祭祀問題」とセットになって、「本地化」及び「宗教間対話」は取り上げられることになる。次節ではこの問題について考察することとする。

#### 四、「本地化」及び「宗教間対話」について

「本地化」についてカトリックでは、例えば『伝教神学』では、福音の「本地化・本色化(土着化)」が達成されるために必要な条件を、「当該地域が持つ文化的方法を用いた表現によって、当該地域の信者の心情を、信仰と融合させることが必要である。(需要以当地文化的方式表達、使当地教友能將情感融入信仰中。)」としている(8)。この問題については、プロテスタントに於いても盛んに研究されている。例えば、『国際学術研討会論文集 基督教與中国本色化』(林治平主編)などを見れば、「本色化」に関する研究が各国の研究者によって為されていることが看取できるし、日本でも山本澄子氏の研究等はその代表的なものと言える(9)。

最後に、これらの根底にある「宗教間対話」について、台湾(及び中国)での研究を取り上げてみたい。

カトリックを例にとると、『衝突与融合 仏教与天主教的中国本地化』では、前教皇であるヨハネ・パウロ二世の「第二バチカン公会議特有の、開放的かつ親和的な雰囲気の下であれば、マテオ・リッチの布教方法が更に、活力と実効を有することは明らかでしょう。(在梵二大公會議特有的開放及交談氣氛下、利瑪竇的傳教方法顯得更有活力和實際。)」という言葉を引いている(10)。

これは、イエズス会の布教に対する、法王庁の反省を踏まえた上での言葉であろう。更に言えば、この言葉によって、本論が十六世紀末からの典礼問題と現在の東アジア地域におけるキリスト教を対象としている理由が、明確に示されていると考えても良いのではないだろうか。

プロテスタント側でも同様な趣旨の発言が見られるが、カトリックの「安易な対話路線」を警戒する研究者もいる。例えば仏教との対話について、次のような発言がある。

「仏教は一つの教義であり信仰である。しかし仏教徒は一人の個人であり靈魂を持つて生きる人である。つまり、仏教は仏教徒ではなく仏教徒もまた仏教そのものではない。キリスト教はこれら仏教徒の靈魂を救おうとしているのであり、仏教教義と言われるものを救おうとしているのではない(それは根本的に不可能

である)。(仏教は一種教義、一種信仰。但仏教徒却是一个、一個有靈魂的活人。所以、仏教不是仏教徒、仏教徒不是仏教。基督教是要拯救有靈魂的仏教徒、不是要拯救稱為仏教的這個教義(根本不可能)。)(11)

これは「宗教間対話」を行いながらも、キリスト教の独自性、優位性をいかに保っていくのか、という困難さを自覚した言葉であろう。

しかし、現在のキリスト教を取り巻く状況から考えれば、このような困難を自覚した上で、様々な宗教や文化的背景を持った価値観との「融和」を見いださなければ、宗教の持つ価値そのものが見失われてしまう危険性もある。だからこそ、東アジア地域特有の文化である「儒教」との「融和(共通点)」を図る次のような発言も出てくるのである。

「儒学は仁を最高の理想としており、「仁」とは人を愛することである。キリスト教は愛を、全てを貫く中心に置き、人を愛する理想態は「自分を愛するように人を愛す」こととしている。この二つの間には、本質的なことから言えば、極めて類似する点があると言える。(儒学以仁為最高理想、「仁者愛人」、基督教以愛為一貫中心、而其對「愛人」之理想、則謂「愛人如己」。二者之間、就其本質言之、実有極類似之处。)(12)

## 五、小結

これまで見てきたことで、台湾人に合った、台湾文化を尊重したキリスト教信仰を構築する(これを「本地化(本色化)」と呼ぶ)上でどのように「祖先祭祀」を位置づけるのか(対応すべきか)が、大きな問題として横たわっていることが確認できた。それは同時に一六世紀からの「典札問題」の根深さを再認識することでもあった。ヴァリニャーノやリッチの採用した「適応政策」は、一旦は挫折の憂き目を見た。しかし、それはバチカン法王庁と清朝政府のかたくな態度に起因するものであった(清朝政府は「リッチの布教方針」については、容認する態度を有してはいたが)。今後、バチカン第二公会議の「対話主義」がどのような経緯をたどり、どのような帰結を迎えるかは分からない。しかし、その最も先鋭的な問題の現れている地域が、他ならぬ東アジア地域であり台湾であると考え、キリスト教教義(神学)に関わる部分、「儀式」として容認できる部分等、真に「対話主義」が問われる試金石として、台湾における「宗教対話」の実践は、

今後とも注視していく必要があると考える。

今回は「信者」の意識を探るよりも「布教者側」からの視点や、事例・研究紹介が多くなってしまった。現地信者の聞き取りなどを通して、より「信者」の意識を浮かび上がらせることなど、すべて今後の課題としたい。

## (注及び参考文献)

- (1) 典札問題については多方面からの研究成果があるが、代表的なものとしては『中国とキリスト教』(矢沢利彦著、近藤出版社、1972年)、『教廷與中国使節史』(羅光著、台湾伝記文学出版社、1984年)が参考になる。最近のものとしては、『天主教教友手冊』(劉鴻蔭神父編著、台湾開道出版社、2003年、300頁〜302頁)が簡便である。この他、資料としては『中国礼儀之爭西文文獻一百篇』(蘇爾等編、沈保義等訳、上海古籍出版社、2001年)や『清中前期西洋天主教在华活動檔案史料』(中国歴史档案馆編、中華書局、2003年)等も便利である。
- (2) 同前矢沢本65頁〜75頁を参照。
- (3) ヴァリニャーノの基本的な布教方針については、『キリスト教史5』(ヘルマン・テュヒレ他著、上智大学中世思想研究所編訳・監修、平凡社ライブラリー、1997年、543頁)や『日本巡察記』(東洋文庫229、松田毅一訳、平凡社、1973年)などが参照しやすい。また、このリッチの「適応主義」について、イエズス会士が一枚岩であったわけではなく、リッチの死後、中国布教区の総会長を託されたニコラス・ロンゴバルディ(中国名は龍華民、イタリア人、一五五九?〜一六五四)は、リッチの存命中からこの布教方針の危険性を指摘していた、とされている(『新版 中国天主教人物史』(方豪著、天主教上海教区光啓社、2003年、70頁)。
- (4) 『第二バチカン公会議 公文書全集』(南山大学監修、サンパウロ発行所、1986年)の中の「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」に「カトリック教会はこれら諸宗教の中に見いだされる真実で尊いものを何も排斥しない。これらの諸宗教の行動と生活の様式、戒律と教義を、まじめな尊敬の念をもって考察する。それらは、教会が保持し、提示するものとは多くの点で異なっているが、すべての人を照らす真理の

光線を示すこともまれではない。」(198頁)とあることを見れば、キリスト教会の姿勢に大きな変化が起こっていることは看取できる。更にこのような認識と表裏を為すように「典札」については、同じく『バチカン公会議』の「典札憲章21(典札刷新の基本方針)」の中に、「キリストを信ずる民が聖なる典札において豊かな恩恵をより確実に得るように、母なる教会は典札の全般的な刷新を真剣に望んでいる。それは、典札が神の制定による変更不可能な部分と変更可能な部分から成り立っているからである。」(12頁)とあるのを見れば、この第二バチカン公会議が「典札」においても大きな転換点になっていることが分かる。

(5) 日本での手引き書とは、『祖先と死者についてのカトリック信者の手引き』(日本カトリック諸宗教委員会編著、カトリック中央協議会、1985年)を指す。

(6) 『天主教教義問題解答』(田永正編、台中光啓出版社、1972年) 167頁。『天主教教友手冊』(劉鴻蔭編著、台灣問道出版社、2003年) 37頁。また同書には、儒教(儒学)との「対話」について言及している項目もある。「第262項 天主教では敵を愛することを主張していますが、儒家ではどうでしょうか。(答) 天主教では恨みに対して仁徳をもつて応え、天主の無差別な愛をその根本に置いている。儒家である「墨子」の「兼愛説」も、正にこれと同じなのだ。(天主教主張愛仇、儒家怎樣? (答) 天主教主張以德報怨、以天主兼愛為出發点。墨子兼愛、正与此同。)」174頁。この他、『教会中国化之我見 一得集』(周長耀著、台中光啓出版社、1970年)、「第五章 三節、我国祖先宗教信仰」(47頁)等を参照。

(7) 『基督徒与敬祖——敬祖研討会彙編』(教会更新研究發展中心、台北中福出版有限公司、1985年) 106頁。また、同書収載の洪明灶著「祖先崇拜問題」(109頁)、ルーシー・タン(Lucy Tan)著「基督教对中国祖先崇拜的答覆」(117頁)等も参考になる。

この他、プロテスタント側の祖先祭祀問題については、『台湾的基督教会与祖先崇拜』(李智仁著、台南人光出版社、1995年)の第三章「台湾伝統祖先崇拜的結構」及び第五章第二節「基督教与祖先崇拜的対話」同第三節「面对祖先崇拜时教会的宣教反省」が参考になる。この書は祖先祭祀問題に関するカトリックとプロテスタントとの対応の違いや、「本地化」の問題について、従来の歴史を概観した上で比較を行っているため至便である。

(8) 『伝教神学』(柯博識著、光啓文化事業、2004年)の「第一篇 伝教的神学反省、第八章 福音的本地化」182頁。

(9) 『国際学術研討会論文集 基督教與中国本色化』(林治平主編、宇宙光出版社、1990年)所収 Joseph Sebes, S.J. 著「Matteo Ricci's Attempt At Indigenization of Christianity in China」等を参照。また、山本澄子著『中国キリスト教史研究』(山川出版社、2006年)の「第九章 第四節「本色教会」論の背景」及び「第十章 中国に於けるキリスト教と祖先崇拜」も参照されたい。

(10) 『衝突与融合 仏教与天主教的中国本地化』(輔大神学叢書54、金粟洙著、台北光啓出版社、2001年) 285頁。(原文『牧我中華』蘇主榮著、香港聖神研究中心、1986年、181頁。)

(11) 『中国民間宗教信仰与基仏問題』(龔天民著、アメリカ龔愛華出版、1992年)。これは、道教、仏教の研究者でもある龔天民牧師の著書である。

(12) 『從基督教看中国孝道』(世明文集選4、何世明著、宗教文化出版社、1999年) 88頁。同じ著者による『基督教与儒学対談』(世明文集選1、何世明著、宗教文化出版社、1999年)の「基督成全了孔孟之道」(146頁)も参考になる。何世明氏は、香港聖公会の牧師であるが、このような言葉は、中国、台湾を問わず、多くの宗教指導者の文章に見られるものである。台湾では、例えば『三字經与聖經 三十二講』(房志榮著、台北天主教之声雜誌出版社、2005年)の第七章「儒教經典とキリスト教聖書との相互共通理解(儒家的經典与聖經的互解)」等を参照すれば、現在のキリスト教側が、どのようにアプローチ(接近)しているのかがよく理解できる。中国では、『対話儒教道与基督教』(何光瀟、許志偉主編、社会科学文献出版社、1998年)及び『対話二：儒教道与基督教』(何光瀟、許志偉主編、社会科学文献出版社、2001年)が参照しやすい。

(参考資料) 紙面の都合上、前半部分のみを掲載した。後半部分については次回に譲る。  
『教友問答手冊 天主教的祖先崇拜』(輔神研究小組編著、光啓出版社、1995年)

現代語訳 (訳文、原文とも注は省略した)

一、天主教(以下カトリックと訳す)の信者は祖先を敬い尊ぶ問題についてどのような見方をすればよいのでしょうか。

【答】伝統文化における「祖先祭祀」は、先祖から与えられた恩恵に対して感謝と敬愛を表すことであり、同時に社会や家庭における倫理観を維持し、個人と全体の調和を増進させるためのものである。だから、「親が生きている間は礼の法則に従って奉仕し、親が亡くなると礼の法則に従って葬式を営み、祭祀には礼の法則に従って法要を営む」(『論語』為政)ことを強調しているのである。

クリスチャンとして洗礼を受けた信者のために言えば、私たちに生命を与えてくれ、一生を捧げてくれた先祖に対して感謝の心を懷くのは当然であり、全知全能の造物主が我々の代々の先祖に栄光を与えられたことに感謝するのである。と同時に、主・キリストの復活を信じる者において、我々と先祖とが同じく主の贖いに預かるという、主の恩寵を受ける集団に属すること、我々と先祖との関係は、時間・空間を超越するのである。このことから、我々信者が先祖を敬うことについて取るべき態度は、「父母の葬式の礼を慎重に大切にし、何代も前の先祖をいつまでも追慕してそれらに対する祭祀を丁寧にする」(『論語』学而)「ことであり、「水を飲んで、その源を思ふ」という自分が由つて来る源である先祖の恩に報い、その親に感謝する精神を保持することである。

キリスト教会においては、成立当初からその祈りの中に死者への祈りがあり、死者が犯した過ちのために苦心したり祈りを捧げたりしている。また、一方では神を証し、神の栄光を受けた諸聖人に対して、執り成しを求めたり、彼らが示した生き様を跡づけるのである。現在の教会では、このような観点に則り、各地区の家庭内での伝統や文化的習俗・儀礼を融合して、死者を追悼する儀式を挙行している。その場合、それらの習俗や儀礼の中にキリスト教の信仰に反するものを避けさえすれば、教会がそれぞれ適宜判断して、その場に対応するのである。

中国の伝統文化における「祭祖」は、その本源に遡れば「祀天」に辿り着く。その元々の意図は、人々に「上帝(上帝)を畏怖させることであり、それは天主(神)をその敬い恐れる最終的な対象とするものであった。後に時代が下るにつれ、歴史の進展と共に宗教的色彩を帯びるようになるのである。我々信者と先祖の生活の中心にあるのは「神」である。だからこそ先祖に対するいかなる追悼や敬意を表す行為に於いても、死者を神と同じように扱って礼拝する必要は全くないのである。そうでなければ先祖の思いや道理に反してしまうことになる。

だから、「先祖に対して敬い感謝を表すこと」で、「(神として)祭り拝む」ことに代え

るのであれば、それは信仰の核心に合致するものである。その上、我々はただ先祖や死者が恩恵を蒙るよう神に向かつて祈りを捧げるだけであり、先祖が残した美風を思い起こしたり思いを馳せたりすることはあっても、自分の利益になるようどこまでも富貴榮達を求めたりするのは全く違うのである。祈りを捧げる時、自分の親友やお世話になった人のためだけではなく、自分とは関係のない人のためにも祈るのである。

(以下、原文を節ごとに挿入する。原本(台湾)は繁体字であるが、できる範囲内で常用漢字になおしてある。但し日本の常用漢字にない場合は繁体字のままとした。)

《原文》一、天主教教友對於崇敬祖先的問題，應抱著怎樣的看法？

【答】傳統文化中的「祖先祭祀」在於向祖先的德澤表達孝思，並維繫社會及家庭的倫理關係，增進個人與群體間的共融和諧，因而強調「生，事之以禮。死，葬之以禮，祭之以禮」(論語為政篇)。為接受基督洗禮的教友來說，對於給予我們生命並奉獻一生的祖先，更當懷著感恩的心，稱謝萬有的造物主賞給我們歷代的祖先，並深信在基督復活的光榮中，我們與祖先同蒙救贖，屬於領受恩寵的大團體，因而彼此間的關係是超越時空的。因此，我們教友對於敬祖的態度是抱持慎終追遠、飲水思源、報本思親的精神。基督的教會在起初便在祈禱中紀念亡者，為亡者的罪過做刻苦祈禱，另一方面對為主作証而享受天主榮光的諸聖，則祈求他們的轉禱，效法他們的典範。今日教會在這個觀點上，融會各地的家庭傳統與文化禮俗，為亡者舉行紀念的儀式，只要避免在禮俗中和基督信仰不合的主張，教會當盡量加以適応。中華傳統文化中的「祭祖」，追本溯源在於「祀天」，基本意旨是教人敬畏上帝，以天主做為敬禮的終向。後來因歷史的發展而加上宗教的色彩。我們教友與祖先的生活中心是天主，因而任何對祖先的紀念與尊敬行動，並不是要把亡者當做神一樣崇拜，否則就背道而馳了。所以用「崇敬祖先」來代替「祭拜」、「祭祀」等表達方式，更符合信仰的真諦。而且我們只是為祖先及亡者的好處向天主祈禱，並追念緬懷他們的遺風，絕不是功利地一味企求富貴與榮達。祈禱時，不只為自己的親友或有關係的人，同時也為那些與我們沒有親友關係的其他亡者祈禱。(波線は訳者による)

二、より詳しく先祖を敬い尊ぶ方法について説明していただけますか。

【答】まず、信者達はミサに参加している時、イエス・キリストや諸聖人と大変深い交わりを持つているが、その中には自分の先祖と全ての死者も含まれている。ミサで用いられる祈禱文の中に次のような言葉がある。「あなたにもすべての先祖と世を去った人々への配慮を求めます、彼らが輝ける御身を拝見できますように。」(感恩經第二式)

この他、毎年十一月の靈魂を清める月には死者のために特別に祈りを捧げる。「彼らに

キリストの栄光を分かち与え、天国へ早く登り、造物主であり世を救う真の神を仰ぎ見て、永遠不朽の幸福を受けられるように」と。

死者を追慕する日や清明掃墓節に、教会の公共墓地で特別に死者を追慕する時、信者は既に亡くなった親戚や友人のために感恩祭を行なうことができる。

春節に於いては、教区で感恩の礼を行なった後、先祖を敬い尊ぶ儀式が行なわれ、自分の由つて来る源を思い、先祖に懐く感謝と敬愛の念を表わす。少なくとも教区の信者達も、先祖の名前を聖堂の中にある共同の位牌に、登録したり遺影をはめ込んだりすることを行っている。そうすることで、主の日に聖堂に入り、祈りを捧げる時に彼ら（先祖）を追慕しやすくなるからである。

以下の問答は、単に実際に応用する規則例を紹介しているだけである。先祖を敬い尊ぶ方法や儀式で唱える経文等については、主教団が出版している『殯葬礼儀』『追思礼儀』経本及び祈祷に関して書かれたハンドブックを参照して欲しい。個人的に、若しくは団体で熱心に祈ることや、共同でロザリーを唱えることなどによって、感恩祭や家族で先祖を敬う儀式に参加して先祖を敬い尊ぶことができる。

《原文》二、請更詳細地說明崇敬祖先的方法？

〔答〕首先教友們在彌撒中、藉著耶穌基督與諸聖有很深的交往、其中包括自己的祖先及一切亡者。在彌撒經文中祈禱說、「求你也垂念所有祖先和去世的人、使他們享見你光輝的聖容。」（感恩經第二式）。此外在每年十一月、煉靈月中、特別為亡者祈禱。「使他們分享基督的勝利、也能早登天鄉、仰望造生救世的真主、永享無窮的福樂」。追思已亡日及清明掃墓節、在教會公墓都特別追思亡者、教友可以為已故親友之意向奉獻感恩祭。在春節、堂區感恩禮之後、皆有崇敬祖先的儀式、表達飲水思源、緬懷先祖的孝思。不少堂區教友也樂於將祖先姓名登錄在聖堂內的共同牌位上、並敬上遺像、便於主日進堂祈禱時追念他們。以下的問答只介紹一些實際應用的準則、至於崇敬的方法與禮儀經文則請參考主教團出版的『殯葬禮儀』、『追思禮儀』經本及相關祈禱手冊。經由個人或團體熱心的祈禱、公唸玫瑰經、參與感恩祭或家族敬祖儀式來崇敬祖先。

三、カトリックには主に顧みられない死者の魂に関する説がありますか。

〔答〕カトリックの信仰に基づけば、この世界に存在する人は皆、全て神の子女であり、神もまた彼らに救いの恩典を与えたまうのである。つまり、彼ら（我々人間）は、自身の良心に従って生活してさえいれば、救いを得ることができるのである。（第二バチカン公会議 教会憲章 18）。

更にカトリック教義の中には、非常に人を慰め安心させることが述べられている。それは「諸聖人と功德を共有している」と言うことである。私が善いことを行なえば、同じように別の誰かがその恩恵に預かり、誰かが善いことを行なえば、私がある恩恵に預かるのであって、私と彼とは繋がっている、ということである。またこうも言える。神の救いの恵みは全ての人に普く与えられる。死者も同じく神の子女なのであるから、神の恩寵を分かち預けられるのである。これから考えれば、孤独な靈魂や放置されて悪霊となる靈魂の説などは成り立たない。

この他、カトリック教会で毎日行なわれる感恩祭の中で、世の全ての死者のために祈りが捧げられる。

《原文》三、天主教有没有無主亡魂的說法呢？

〔答〕根據天主教的信仰、世上所有的人都是天主的子女、而且天主也賜給他們得救的恩典。就是只要他們按照他們的良心生活就能得救（梵二教會憲章 18）。且在天主教教義中、有一端很安慰人心的道理、即「諸聖相通功」。我若行了善功、別人也有份。別人行了善功、我也有份、彼此連繫。也可以說天主的救恩普施眾人、亡者因同是天主的兒女而得分沾天主的恩寵、因此就無孤魂野鬼之說。此外、天主教教會在每天的感恩祭中、也為世上所有的亡者祈禱。

四、死者はどの様な状態で墳墓の中に存在しているのですか。

〔答〕中国の民間における觀念では、人は死後、靈魂と身体の二つに分かれるとされている。靈魂がどの様な状態で墳墓の中に存在しているのかということは、大変重要なことである。何故なら、もし、誰かの靈魂が墳墓の中で安息を得られていない状態ならば、その靈魂は彼の家族に危害を及ぼすだろうからである。

カトリックの信仰に基づいて言えば、死者は生きていた時の身体が墳墓の中に存在しているに過ぎない。何故なら、亡くなると個体としての人はすぐに神の前に行つて審判を受けるからである。死者は亡くなることによってその存在様式と状態を変えるから、墳墓の中には遺体が残っているだけである。

教会の終末思想には二種類の区別がある。

一つは伝統的な見方であり、幾分靜態的である。それは空間（例えば地獄と天国はどこかの場所である）と時間（例えば死後、靈魂は煉獄に於いて浄化される過程を経る。つまり、死後は先ず私的な審判を受けた後、再び煉獄に行かされ、その後公の審判を受け、そして復活する等、時間的に前後の順序がある）という区別を設けるものである。

もう一種類の終末思想は、幾分全体・包括的（死者には靈魂や肉体、理性や直観感覚などの区別がないとする）で、動態的なもの（死者と生者の間にはある関係が存在し、両者は神の愛の中で互いに疎通することがあり、死者の生命は依然として維持されているとする）である。

この兩種の終末思想を明確にすれば、多くの問題についてもはつきりすることができるだろう。

《原文》四、死者は以何種狀態存在墳墓中？

〔答〕在中国的民間觀念中、人死後靈魂与肉身是一分的。靈魂如何存在墳墓中是很重要的事件、因為如果某人的靈魂在墳墓之中得不到安息、那將危及他的家人。根據天主教的信仰、亡者只是在世時的遺体存在墳墓中、因為他一死亡、整個的人就會到達天主台前接受審判。亡者因死亡而改變了他存在的方式和狀態、存在墳墓中的只是遺体而已。教會的末世思想有兩種區分：一種是傳統的看法、比較是靜態的、有空間（例如：地獄、天堂是某地方）、和時間（例如：死語在煉獄要經過一段時間的煉淨。死後先經私審判、再到煉獄、後來是公審判、復活等先後次序）的區分。另一種末世思想則是比較整體性的（亡者並沒有靈魂和肉身、理性和直観等的區分）、動態性的（亡者与生者仍有關係存在、彼此在天主的愛內仍相通、亡者的生命仍在進展中）。清楚了教會的兩種末世思想、許多問題可以得到澄清。

五、台灣の民間における見方によれば、もし亡くなった親戚や友人のために何も物を供えなかったら、死者の靈魂はそのため苦痛を感じて現世の人に害を加えると言います。カトリック信者としては、このような通俗に対してどのような見方をすべきでしょうか。

〔答〕長い歴史の中で、例えばローマの地下墓所（カタコンブ）、つまり初期キリスト教徒が迫害を受けて逃れた場所には、多くの言葉が残され、その中には次のようなものがある。「教会と信者達は死者のために祈り、その祈りは彼らへの神の恩寵を感謝するだけのものではなく、同時に神に死者への永遠の安息を賜うことを願ったものでもある。」カトリックの伝統の中で煉獄に対する見方については、所謂「聖人」を除いた、大部分の死者は皆、一定の浄化段階を経て、初めて栄誉ある幸福な世界に到達できるのである。信者達も常に死者のためにミサを捧げ、彼らのために祈り、善行を重ねて神に奉仕しなければならぬ。

同時に、祈りなどの力を借りて、いつも世を去った人々への思いを新たにすれば、更に世を去った人との繋がりを深くすることができ、諸聖人と功德を共有することにもなる。

世を去った親戚や友人に物を供えることについて、肝心な点は「死者に仕える場合、生きていた時と同じようにする」（『中庸』第19章）という孝の精神にある。カトリックの信仰に基づけば、死者も生者も同じように一人の神の庇護の下にあり、彼ら死者は已に現実世界（現世）の何の物質をも必要としない。だから、生きている（現世にある）親戚や友人の供える物を何にも必要としないのである。私達が死者に献上する「素祭（穀物の供えもの）」は、その気持ちの表れに過ぎないのである。

その上、煉獄にある死者は、神の愛と更に深い関係にあるのだから、彼らはかえって私達現実世界に生きる者の幸福の方により関心があるはずである。

《原文》五、按照台灣民間的看法、如果不為去世的親友供奉東西、死者的靈魂會為此受苦而加害於現世的人。做為天主教友、當如何看此習俗？

〔答〕從古老的歷史中、例如羅馬墓窟中、即初期教會基督徒受迫害之避難地、多處所提的跋語、就有這個記載。教會与教友們是為亡者祈禱的、那個祈禱、不只是感謝龍召那些人、同時也祈求天主賜他們永遠的安息。在天主教的傳統中、對於煉獄的看法、也就是除了所謂的「聖人」之外、大部分的亡者、都要經過一段淨化的過程、才可以達到榮福直観的境界。教友們也常為亡者奉獻彌撒、為他們祈禱、以善行奉獻給天主。同時、藉著祈禱等等的力量、常常思念起去世的人們、更可以加深与他們的連繫（諸聖相通功）。至於為去世的親友供奉東西、主要在於「事死如事生」（『中庸』19章）的孝道精神上。按照天主教的信仰、亡者与活人一樣有同一的天父照料著、他們已不需要現世世界的任何物質、因此就不需要任世的親友供奉東西。我們為亡者所獻的素祭、只是內在心意表達、而且、煉獄中的亡者、因与天主的愛有更深的關係、他們反而更關心我們現世人們的幸福。

六、人々の所謂「主を失い濡れ衣を着せられて亡くなった（この世に恨みを持ってさまよう）靈魂」は、人に害を加えることができますか。

〔答〕カトリックの信仰では、人は死後、全てを完全に神の手中に収められ、神のみがその魂を見守ると信じられている。これに由れば、主を失って恨みを持つてさまよう靈魂は存在しないことになる。もし、家庭で邪悪な勢力の妨害を受けたならば、神父に解決のための協力を頼むことができる。

キリスト教徒がこの世で対抗しなければならないのは、亡くなった先人の魂ではなく、悪魔の陰謀である。つまり、（例を挙げれば）「エフェソの信徒への手紙」第六章10～12節にあるように、対抗すべきは世の支配者と権力者であり、神はキリストによってそれらの武装を解除したのである。「コロサイの信徒への手紙」第二章6～19節、特に第15節



は私達に明確な解答を与えてくれる。

《原文》六、人家所謂の無主冤魂、是否会加害於人呢？

〔答〕 天主教的信仰相信人死後、他的一切完全掌握在天主手中、天主会加以照顧。因此所謂の無主冤魂是不存在的。如果有家庭受邪惡勢力的困擾、可以請神父協力解決。基督徒在世上要對抗的、並不是先人的鬼魂、而是魔鬼的陰謀。就是厄弗所書第六章第10、12節所說的、要對抗掌權者和掌權者、而天主藉著基督可解除他們的武裝。哥羅森人書第一章6、19節、特別是第15節給了我們清楚的答案。

七、多くの先祖の中で、地獄に落ちた者はありますか。

〔答〕 神の無限の愛の中で、私達は神を受け入れるか拒絶するかを選択する完全な自由を手に入れている。神を受け入れることを選択したならば、永遠に神と共に生活する。一方、神を拒絶するのならば、永遠に神から離れるのであり、それはつまりもう一つの情況、地獄に落ちることになる。このことから地獄に落ちる人もいることが分かる。

私達は地獄の存在を肯定するけれども、どの人が地獄に落ちるかどうかを肯定することはできない。

《原文》七、衆祖先中是否有部分進入地獄呢？

〔答〕 在天主無限的愛中、我們擁有絕對的自由去選擇或拒絕祂。選擇祂的、就永遠與祂生活在一起。拒絕祂的、就永遠遠離祂、也就是進入另一種狀況、地獄。因此有人進入地獄是可能的。雖然我們肯定地獄的存在、却不能肯定某人是否進入地獄。

八、もし、先祖を大切にしなければ、悪い報いがあるのでしょうか。

〔答〕 中国人の民間における伝統的な觀念では、先祖を大切にしなければ、すぐに悪い報いに遭うとされている。主を失い、恨みを持つてさまよう魂について述べた所で既に触れたが、カトリックの信仰に基づけば、何故、既に世を去った人が現世の人に害を加えることができないか、ということ以外に、何故、私達キリスト教徒が先祖に対する尊敬や感謝、そして祈りを重視するだけでなく、死者に対する尊敬や感謝、そして祈りも大変重視していることについては、これまでに紹介してきた。

先祖を大切にするのはとても善い行いであるし、中国に固有の伝統的な道德觀念でもある。しかし、より注意を払わなくてはならないのは、（死者ではなくて）目の前にいる、助けを必要としている人々である。

ルカの福音書にある、父親を埋葬するために家に帰りたいと願った一人の信者に対する

るイエスのお答えは、私達、特に孝の精神を重んじる中国人に非常に怪訝な感情を抱かせるだろう。「死んでいる者達に、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って神の国を言い広めなさい。（ルカの福音書 第9章60節）」イエスの意図は当然、私達には世を去った親しい人に対する関心は必要ないということにあるのではなく、イエスの真の意図は、私達に、天国が近づいていることに意識を向ける方がより重要である、と気付かせることであつたのである。

言い換えれば、私達にとつて、生きている人々に対する愛の施しの方が、亡くなった先祖に対する気持ちよりもより重要である、ということである。これは悪い報いがあることをただ恐れてばかりという、それだけの理由で先祖を敬い尊ぶ必要はないのであり、より良いことは積極的にこの世に生きている兄弟姉妹に愛を施すことであるということに気付かせようとしているのである。

《原文》八、如果不重視祖先的話、会有惡報嗎？

〔答〕 在中国人民間傳統觀念、認為如果不重視祖先的話、就会遭到惡報。在講到無主冤魂時、我們已經解說過、按照天主教的信仰、為什麼已過世的人不会回来加害於人之外、以上我們也介紹過、為什麼我們基督徒不只重視對祖先的崇敬及祈禱、也很重視為所有亡者的崇敬及祈禱。重視祖先是好的行為、也是中國傳統的固有道德、但是更要注意目前那些需要幫助的人。在路加福音中、有一位門徒請耶穌讓他回去埋葬他的父親、耶穌的回答使我們特別重視孝道的中國人感到訝異。「任憑死人去埋葬死人吧。至於你、你要去宣揚天主的國（路9:60）」。耶穌的意思並不是要我們不要關心已逝的親人、可是祂的意思、是要我們注意天國的來臨更為重要。換句話說、我們對活著的人的愛心比對已故祖先的重視更為重要。這是要我們不要因為惟恐有惡報而去崇敬祖先、更好是積極地愛活在世上的兄弟姐妹們。

九、カトリック信者の家の中にも、死者の名前を記した名簿を置くことはできますか。

〔答〕 死者の名前を記した名簿を家に置くことは、中国人の生活の中でも、家譜や祖譜（族譜）と並んで、大変良い習慣の一つである。以前は大変多くの宗族或いは直系の家に、親戚などの名前を記した人名録、巻物と同じようなものがあつた。信者達は名前の上に受洗した年月日と洗礼名を記していた。

《原文》九、天主教的家庭裡也可以有亡者的名冊嗎？

〔答〕 亡者的名冊是中國人生活中、一個很好的習慣、如同中國人之家譜、祖譜。以前大多有宗族或直系親人名錄、如卷軸一樣、教友則加上受洗年月日及聖名。

一〇、カトリック信者の家の中にも、死者の位牌を置いて供養することはできますか。

【答】カトリックの信仰から考えると、死者の霊魂が位牌に宿ることは全くないことになる。位牌や遺影を供える主な目的は、死者を追念するのに、そのような物を見ると良くその人のことを思い出せるからである。

もしこれが信者についてのことだったら、死者の姓名以外に、位牌の上に十字架と洗礼名を刻むことに問題はない。

現代の若い人の多くは現代的な建物に住んでいるから、その構造や間取りから、先祖の位牌を置いて供養するのは却って適合しておらず、それ故先祖の生前の画像などを代わりに置く方がより良いのである。

《原文》一〇、天主教的家庭裡可以供奉亡者的牌位嗎？

【答】按天主教信仰、亡者靈魂並不附在牌位上、供奉牌位或遺像、主要是紀念亡者、為能睹物思人。如果是教友的話、除了亡者的姓名外、不妨在牌位上加放十字架及聖名。現代年輕一輩很多人住現代房廈、其格局佈置若放祖先牌位、反而不適合、所以改放祖先生前画像更好。

一一、台湾の民間で行なわれる中元節には、カトリックの信者達ほどの様な態度で臨むのが一番良いでしょうか。

【答】教会は歴代の伝統的な習俗を踏襲して、毎年十一月を霊魂を清める月とし、十一月二日を、死者を悼む日としている。台湾の民間宗教でも、特に農曆七月を「普渡陰魂（あまねく死者の魂を救う）」の月とし、七月十五日の中元節を「普渡陰魂」を広める日としている。その目的はそのように忘れられた死者を追悼するためである。

当地の主教団は、また信者達にこの中元節に何か特別なことをするように明確には定めていないから、七月が死者にとって特別意義のある月という訳ではない。

但し、もし信者が当地の文化風俗との融合を願い、七月に多くの死者のために祈りを捧げたり、供物を献上したり、善事を行なおうとするのであれば、それもまた良いことである。その意義と効果は、普渡捧げている（祈りやお供え等の）ものと同じであり、個人はその希望に従って自由に決定することができる。

《原文》一一、在台湾民間的中元節、天主教的教友該有怎樣的態度才好呢？

【答】教会依襲歴代の伝統習俗、以每年的十一月作為煉靈月、並明定十一月二日為追思亡節。在台湾民間宗教中、也特別以農曆七月作為普渡陰魂月、且以七月十五「中元節」作為拉大普渡陰魂的節日、其目的皆為追悼那些被人遺忘的亡者。本地的主教團並未明定教友在

中元節要特別做什麼、因為七月為亡者並無特別的意義。但是如果教友願意配合本地的文化風俗、而在七月多為亡者祈禱、獻祭、行善功、也是一件很好的事。其意義與效果與在平常奉獻是一樣的、個人可按其意願自由決定。

一二、一般的な葬儀において、葬儀を執り行う家に供物（もしくは死者の遺影や位牌）を送り、葬儀を執り行う家はそれに対してお礼の贈り物をします。カトリックの信者としてはどの様に対処すれば良いでしょうか。

【答】親戚や友人で、それぞれに対する親密さや普段のつきあいの深さに応じて、葬儀を執り行う家に物品や金銭を送り、そうすることによって亡くなった人への哀悼の意を表わし、同時に葬儀の費用を援助する。葬儀を執り行う家は普通、「誰々は哀悼と感謝を捧げます」と書かれた毛布一枚を、お礼として送る。これらは人として持っている当たり前の感情である。

しかし、最も良いことは無駄に費用をかけず、キリストの貧しく質素にするという精神に倣って、葬儀の費用を節約して、援助が必要な兄弟を助けられる時が出てくれば、このような風俗習慣を更に意義のある段階にまで転換し引き上げることができる。

《原文》一二、一般在喪禮中有致贈喪家奠儀的習慣、而喪家也有回禮之儀。做為教友應該如何才好？

【答】親朋依親疏與交情之程度、向喪家贈送物品或金錢、藉以向故人表示敬悼之意並協助治喪費用。喪家一般也以送毛巾一條、及書「某某哀感謝」為回禮、此乃人之常情。然而最好不要浪費、應當效法基督神貧樸素的精神、有時亦可節省喪葬費用、幫助需要的弟兄姐妹們、使此一風俗習慣、提昇轉換為更有意義的層面。

（本論（注5）でも紹介したように、このような「祖先祭祀」に関わる信者向けの冊子は、日本でも出版されている。『祖先と死者についてのカトリック信者の手引き』（カトリック中央協議会 1985年）がそれであり、今回訳出した本参考資料もこれを参照している。これら二つの冊子を比較することによって、日本と台湾それぞれの宗教状況の差異が見えてくるが、それについては稿を改めて論じることしたい。）

・本稿は、平成19年度文部科学省科学研究費補助金「若手研究（B）」（研究課題番号19720011「東アジアの宗族におけるキリスト教思想の影響―儒教規範に基づく家族制を中心に―」）による研究成果の一部である。